園芸農林業がつくる京都周縁の風景

はじめに　文化遺産部景観研究室では、2015年度から京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課からの委託を受けて、京都市の文化的景観の調査を実施してきた。調査対象は京都市域全体とし、中心地域とそのまわりに広がるヒンターランド（後背地）を全体として「京都」と捉え、それぞれの役割や暮らし、その結果としての現在の景観の把握をおこなった。本稿ではその成果の一端として、京都周縁地域の農林業の営みと景観の特性を紹介したい。

京たけのこ　北摂山地東麓にある大枝から長岡京市にかけての西山一帯はたけのこの産地である。『雍州府志』竹木部の竹の項では「所々にこれあり。西郊の産、特に大なり」と記載されており、17世紀後半には良質の竹材が採れる地域とされていたことがわかる[1)]。その後、天保年間（1830～1844）に食用としての孟宗竹のたけのこ栽培が普及し、都人の食文化に対応するため高品質のたけのこづくりがおこなわれてきた[2)]。現在、西山で生産されるたけのこは「京たけのこ」や「白子筍」というブランド名で売り出され、トップシーズンには１本数千円で取引されるものもある。

竹林では孟宗竹の維持管理のため茅や藁を敷いたり赤土を入れたりといった手入れがおこなわれる。さらに、たけのこが伸びて皮を落としながら親竹に成長する５月前後になると、その竹を揺すって先の部分を折る。竹の先を折ることで林床まで日光を入りやすくして次世代が育ちやすい環境を整えるとともに、風雨による竹の倒木を防ぐ。こうして先端が丸みを帯びた竹に仕立てられている（図38）。随筆家である相馬大は西山の竹林で作業をする人から以下の話を聞き記している[3)]。

> 竹かて、みたら、わかるもんや。これは、竹の梢がのうて、折れてまっしゃろ。こうゆう竹やぶは、竹の子をとる竹やぶや。そんで、土たがやしてやらんと、あかん。竹の子を、親竹にするときはのう、こう揺するやろ、ほしたら梢の十段めぐらいで、ぽきんと折れるんや。この親竹が、一年おきに、子を生みよるかんじょうや。あっちゃの竹やぶ、あれは、竹とるやぶや。梢が、ついてまっしゃろ

また、たけのこを生産する竹林では年中何らかの作業がおこなわれるため、小さな作業小屋が設けられる（図39）。梢のない竹と作業小屋のある竹林は、京都周縁の京たけのこ生産が形づくった風景といえる。

宇治茶　京都盆地の南東端にある宇治は、中世以降、宇治茶の生産地となった。良質の茶葉が育つ条件は、水はけがよいこと、昼と夜の温度差があること、霧が発生しやすいことなどである。宇治はこうした条件に適合し、また京の周縁に位置することから、15世紀中期までには日本を代表する茶の産地となった。

宇治での茶栽培は覆下（おおいした）栽培と呼ばれる覆いの中で育てる方法がとられている。覆下栽培は16世紀初頭に宇治で発明され、日本固有の抹茶の誕生につながった。覆いは以前はよしずの上に稲わらをふる「本簀（ほんず）」と呼ばれるものだったが、昭和40年（1965）頃から作業が簡易になるよう資材開発がおこなわれ、寒冷紗と呼ばれる黒いビニールシートの覆いが開発された。この覆いの中で育てられる茶の木は芽を手作業で摘まれるため、自然樹形で仕立てられる。覆いをしない茶園では現在は新芽を機械で刈り取るため、自然樹形の茶の木にはならず、ほとんどがかまぼこのような形となる。宇治市から伏見区向島にかけての茶園はほぼ覆下栽培であり、宇治茶独特の景観となっている（図40）。

宇治茶の生産現場のもう一つの特徴は、オイゴヤ（覆小屋）と呼ばれる小屋が必ず付随することである（図41）。茶園では毎年、よしずと稲わらを大量に使ってきた。よしずは数年に渡って繰り返し使い、また稲わらも秋から春にかけて保管しておかなければならないため、資材用の小屋が必要となる。寒冷紗となっても資材の多さは覆いのない茶園とは比べようもない。高品質なものをつくる京都周縁での茶業の特徴をよく示している。

北山杉　丹波高地の南端に位置する中川は、北山丸太と呼ばれる床柱などの杉の化粧材を主に生産してきた北山林業の中心地である。丸太のまま材となるので、こまめに枝打ちをして丸太の表面に枝を打った跡が出ないよう、きめ細かな手入れを林内でおこなう。そして山から伐り出してきた杉を、かつては中川の近くにある菩提滝の滝壺でとれる砂で磨き、集落内で乾燥させて京都市内に出していた。

無節、直通で完満な北山丸太を生産するため山では密

図38　梢のない竹林

図39　竹林の間に点在する作業小屋

図40　自然樹形の本簀茶園での茶摘み

図41　茶園に付随するオイゴヤ

図42　梢にのみ枝葉が残される北山杉

図43　山中の山小屋

植をおこない、丹念な枝打ちが欠かせない。北山杉の林はスギが整然と立ち並び、枝葉は梢の先端にしか残されない（図42）。その結果、他ではみられない樹形となり、写真や絵画の対象として見出されるようにもなった。

また、抑制栽培によって細い丸太を育てる北山林業では、３～４年毎の枝打ちや毎年の下草刈りといった林内での密な作業が必須となる。そのため中川では山の中に山小屋をつくり、昼食時の休憩場所や雨宿りの場所、道具の保管場所などとして使ってきた（図43）[4]。

小　結　京都の周縁地域での農林業は、単に鮮度の高いものを供給するというわけではなく、労働力多投下によるきめ細やかな栽培と加工に特徴があり、まさに「園芸農林業」と呼ぶにふさわしい農業形態をとっていることがわかる。その結果、栽培方法が特殊となり、独特の樹形となったり小屋を併設したりする農林地の景観が育まれている。京都の景観というと平安京・洛中があった中心地域にばかり注目されがちであったが、文化的景観によって中心地域と支え合う関係にあるヒンターランドの営みや景観に目を向けることができたこと、またその特異性や類似性を見出すことができたことが本調査の成果の一端と考えている。

（恵谷浩子）

註

1）立川美彦編『訓読雍州府志』臨川書店、1968。
2）長岡京市教育委員会『京タケノコと鍛冶文化』2000。
3）相馬大「京の山里」『京の里　大原－鞍馬・貴船・北山・西山』太陽臨時増刊236、平凡社、1982。
4）本間智希「山の拠点としての山小屋」『京都中川の北山林業景観調査報告書』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、2019。